国際経済学入門

——21世紀の貿易と日本経済をよむ

中北 徹
Nakakita Toru

CHIKUMA SHINSHO

……今後、日本の経済システムの見直し、再構築が行われるなかで欠くことのできない視点は「市場化」である。日本経済の成長率が低下するなかで、活力を維持していくためには、市場の論理・市場の機能を重視することが何より求められてくる。次世代産業も経済地域もこうした発想のなかから出現するのである。……

ちくま新書
080

ちくま新書
080

国際経済学入門
——21世紀の貿易と日本経済をよむ

一九九六年九月二〇日　第一刷発行

著　者　中北　徹（なかきた・とおる）
発行者　柏原成光
発行所　株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　郵便番号一一一
振替〇〇一六〇―八―四一二三
案　内　〇四八―六五一―〇〇五三（サービスセンター）
装幀者　間村俊一
印刷・製本　三松堂印刷株式会社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
© NAKAKITA Toru 1996　Printed in Japan
ISBN4-480-05680-7 C0233

ちくま新書

国際経済学入門

——と日本経済をよむ

中北 徹
Nakakita Toru

「外国貿易は一国の富と繁栄を明らかに導くものであり、輸入によって、その土地、気候、資本、産業にもっとも適合した生産財を得ることができ、他方で、それを支払うために、その状況により適応した財を輸出することができる。……一番安い市場で買い取り、一番高い市場で売りさばく、という個別の取引においてすべての商人を規定する格言が、国際貿易にも最善のルールとして厳格にあてはまる。これらの原則にもとづく政策は、世界の通商をして相互利益の交換、各国民の間に富と喜びを増大し、普及させる。」

（トーマス・トーク「ロンドン商人による嘆願書」一八二〇年）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国際経済学入門

——21世紀の貿易と日本経済をよむ

【目次】

プロローグ 009

第1章 貿易はなぜ行われるのか 015

1 国際貿易の基礎理論 016

2 自由貿易の歴史と理論 026

第2章 貿易黒字はどこへ行くのか 055

1 国際収支とは何か 056

2 黒字のたまる仕組み 066

第3章 円高と産業構造の調整 077

1 為替レートはどうして決まるのか 078

2 円高のメリット・デメリット 087

3 構造調整をうながす円高 099

第4章 企業はなぜ海外生産をするのか 109

1 「国境」をこえる経営資源 110

2 グローバルな産業調整 121
3 「産業の空洞化」から「産業の高度化」へ 127
第5章 日本の物価はなぜ高いのか 133
1 内外価格差とは何か 134
2 内外価格差を生む要因 143
第6章 消費者と消費者運動 155
1 市場経済と消費者 156
2 これからの消費者運動 169
第7章 豊かな生活のための政治経済学 175
1 国際的な調和と市場開放 176
2 「生活大国」への日本の道 186
あとがきにかえて 203

〈プロローグ〉

本書は、現代経済学の一応用分野である国際経済学への入門書である。

国際経済学は主権国家の存在を前提に、諸国間の経済的な関わりを分析することを目的とする。すなわち、資本、労働といった生産要素は国境線を越えて自由に移動することはないが、財・サービスの自由な交換を通じて世界の資源配分が改善され、また、海外から競争圧力が有効に働くことによって国内の経済活動や産業構造にどのような変化やイノベーションがもたらされるかを分析することを主な目的としている。生産要素が国境線の内側に封じ込められていても、自由貿易という競争メカニズムの働くことで世界全体はむろん、その国だけでも資源の効率的な配分が達成されることを説くのである。国際経済学は応用分野であるが、そこでもやはり、市場メカニズムの機能とその限界を解明することが眼目となっている。

本書も国際経済学の入門書として、御多分にもれず貿易の基礎理論である比較優位の解説から出発して、国際収支、為替レート、対外投資、産業調整のメカニズム、内外価格差、市場開放など、現在の日本経済と社会を考えるために重要な視角とテーマを、できるだけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平易に説明を加えることに意を用いた。

しかしながら、もし本書のなかに類書にはない新しさがあるとすれば次の三点であると考える。

第一は、本書のスコープを国際貿易論にかぎらず、直接投資や経常収支などの金融的側面に関連することがらも議論の流れのなかで進んで取り入れたことである。現実の現象はリアルな側面と金融的な側面とが同時に絡み合いながら生起し、ダイナミックな発展をとげていくのであって、両者は切り離せない性格を深めている。たとえば、産業調整は円高という金融面での変化を契機に作動し、それが次の実物面での発展を生み出すメカニズムにほかならない。

第二は、国際経済学の新しい視点として、戦略的な貿易論の解説と評価、ネットワーク競争のメカニズム、直接投資の役割などを取り上げたことだ。今日、主権国家の枠組みを超えたさまざまの動きが顕在化している。企業活動のボーダーレス化であり、また個人のレベルではインターネット化が急速に浸透している。こうした変化はこれまでの国家の枠組みを変え、また国際経済学の分析枠組みをどう変容させるのだろうか。

世界をみると電気通信やコンピューターなどハイテク技術の進歩には著しいものがあるが、これらの産業はグローバルな市場を拠点にして新しい競争メカニズムを作りだしてい

る。とくに規模の経済性が果す役割は重要性を増し、従来の比較優位に立脚した説明だけでは現実の動きを説得的に解釈することは困難になっている。現実とのシーソー・ゲームをつづけながら理論は進歩を遂げているからである。

第三は、国際経済学という外に開かれた窓をとおして、日本経済の特異性と問題点を浮き彫りにすることである。つまり、世界との関連を通して現実の日本経済の特質がいっそう鮮明に映し出されると考えるからだ。

戦後日本は奇跡的な成長をとげ、経済大国という地歩を築くことができたのだが、それゆえにまた、現在の日本経済は大きな課題を抱えている。一人当たりGNPでは世界のトップクラスにあり、国民の個人金融資産は一二〇〇兆円に迫ろうとしている。こうした高度成長の賜物を賢明に運用し、世界の繁栄に役立てるためにはもはや、明治以降一三〇年余におよんだ上からの改革、強大な官僚機構を軸とする経済体制では十分に対処できない。すなわち、日本経済は市場の自律化、世界標準にたった運営が求められる段階、つまり「市場の時代」に突入しているのだ。

各章では、現在起きているさまざまのホットイシューを経済学の観点から取り上げているが、本書の副題である「21世紀の貿易と日本経済をよむ」というもう一つのテーマにつながっている。本書を契機に諸兄の関心が触発されてさらに論議をすすめ、国際経済学へ

の理解を深めていく好機となれば著者にとって望外の幸せである。

ここで、本書の構成と特色を述べておきたい。

第1章では、なぜ貿易が行われるのか、という問題を出発点に国際貿易の問題を取り上げる。ここでは伝統的な国際経済学の枠組みにたって比較優位の理論を解説するとともに、そのメリットは何かを説明する。さらに、自由貿易が果した歴史的な役割、現在の直面する課題などを具体的に解説した。さらに、新しい貿易理論がどのような内容をもち、いかなる意味において挑戦的なのかについても言及する。

第2章では、国際収支、とくに経常収支の問題を取り上げる。経常黒字とは何かを説明し、それがどのような意味をもっていて国際貿易とどう関連しているのか。また、マクロ経済学の観点からは、日本の膨大な黒字と円高、貯蓄との基本的な関係を検討する。新体系にもとづく国際収支勘定についても解説し、それと国民経済計算とのつながりについても説明を加えた。

第3章では、貿易と為替レート、あるいは、黒字との関係をミクロの視点から解説しつつ、円高と産業調整の問題を取り上げる。国民経済からみてどのようなコストが発生しているのかを明らかにし、現代の産業調整の意味を検討する。

第4章では、企業の海外生産という角度から直接投資の問題に照明をあてながら、グロ

ーバルな文脈でみた産業調整の問題を多面的に検討する。さらにそれに関連して産業の空洞化などの問題も取り上げる。

第5章では、日本経済の歪みを映し出す鏡として内外価格差の問題を検討する。内外価格差が発生した原因や背景、その意味などを解説し、規制緩和など具体的な対策にも言及する。

第6章では、日本の消費者運動を批判的に取り上げる。賢明な消費者運動は市場メカニズムが有効に機能するための不可欠のインフラである。しかし、現実はそのような役割を果しておらず、むしろ資源配分の歪みを増幅し、規制緩和を妨げる遠因にもなっている。コメ問題を事例に、なぜ消費者団体の行動が時代の要請に追いつけず、明確な目標を失っているのか、などを検討する。

終章では、現代日本の経済システムの直面する問題点を検討したのち、国家と企業そして個人との関わりを明示していくなかで、「生活大国」を構築するための道筋を考える。

最後に繰り返しになるが、あくまでも、この本をつらぬく基本的な視角は市場メカニズムであり、たえざる競争とイノベーションがあって日本経済に活力をもたらすということを強調しておきたい。

第1章

貿易はなぜ行われるのか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com